

国際発表に向けての第一歩

徳島大学大学院保健科学教育部
竹上和希

はじめに

私は、第70回総会学術大会に学生派遣として参加した。今回の総会学術大会は学会の国際化ということで多くの英語発表がプログラムに組み込まれていた。私は、さまざまな学会で何度か発表をしたが、近いうちに国際発表にも参加をしたいという考えを強く抱いていたので、大会中はできる限り英語のセッションに参加できるように心がけた。以下に、発表された演題から特に興味深かった演題三つを紹介する。

興味深かった演題

一つ目は演題番号84「Development of a novel operation system for angiography by use of motion sensor」である。この演題は英語の演題で、interventional radiology(IVR)において表示された画面を技師または医師が手袋を着用した状態でも画面に触れずに操作できる方法を研究したものである。私はIVRの現場にたちあうこともあるが、医師の指示を聞いて放射線技師が操作するためにうまく噛み合わない場面もみうけられる。しかし、この技術を用いると医師または放射線技師の思う通りに操作することができ、時間の短縮にも繋がるのではないと思う。また、発表の仕方においても演者の先生が実際にジェスチャーで説明をしたり、重要なフレーズを強調したりすることで非常に理解しやすい演題であった。今までの私の発表ではこのようなことができていなかったのが、今後取り入れることができるように努力したい。

二つ目は入門講座2「英語発表の第一歩(1)英語スライドの基礎」である。この演題は国際発表の際に必要な英語スライドの作成法ということで、スライドの構成、各スライドのタイトルの付け方および1枚のスライドでどのようなことを示すかなどを紹介した演題である。国際発表を行う際には、まずスライドの作成が必要である。私は、単に日本語でのスライドを英語に変えるものだと思っていたが、タイトルの付け方ひとつでも、それでは聴衆に理解していただけないことが多々あるということを知った。例えば、タイトルは単にpurposeやresultとだけ書くのではなく、各スライドに合ったタイト

ルを付ける必要があり、タイトルをみただけでそのスライドがどのような内容であるかを示すことが非常に大切である。ほかにも私が何気なく決定していた時制や単数・複数などの選び方もわかりやすく丁寧に教えていただいた。また、よく使われている単語や文法を紹介していただき、良い英語発表スライドの作成のために役立つ知識を身に付けることができた。次回は、英語発表時の発音やアクセントについての講座を開いていただけるということなので、ぜひ参加して学びたい。

三つ目は演題番号204「デジタル画像システムにおける患者体動による不鋭(ボケ)の解析」であり、体動によるボケの検出に関する演題であった。私たち診療放射線技師に求められる被ばく線量低減にも繋がる重要な研究の一つであり、深く興味を持った。また、演者の先生の発表の様子が今にも身を乗り出しそうな感じであり非常に強く印象に残っている。質疑応答ではどんな質問に対しても適切に返答しており、知識の多さが感じとれた。研究内容だけでなく他の知識も多く身に付けることで充実した質疑応答ができるということを感じさせられた。

総会学術大会に参加して

私が登録した演題が学生選抜発表および英語発表に推薦され、二つの場で発表した。まず学生選抜発表では、私と同世代の学生の発表を聞いた。スライドの作り方が独特であったりスライドの説明が非常にわかりやすかったりと驚かされることばかりであった。例えば一つのスライド内でも文字や写真の配置、写真の使い方など私の考えにはなかったことを知ることができた。演者が聴衆の方を向いて話すかそうでないかによっても聞き取りやすさが異なるということを実感できた。同世代の方の発表だったので、非常に刺激を受け今後の研究の意欲をさらに高めることができた。

また、画像工学のセッションでは英語による発表を行った。私は英語での発表が初めてで他の先生方の英語発表に比べてもかなり劣っていたが、私でも発表を終えることができたという実感が残っており以前よりも英語に対する不安を減らすことができた。まだまだ英語

力を鍛えなければいけないことも実感したが、この経験が必ず国際発表への第一歩になったことは間違いないと思う。他の先生の英語発表やスライドの作成法のセッションなどから学べたことは非常に多く、今後の研究にも欠かせないものになった。

謝 辞

最後になりましたが、第70回総会学術大会に学生派遣として参加して、大変貴重な経験をすることができました。学生派遣を採用していただいたことに感謝しています。今後とも、学術大会へ積極的に参加し研究発表を続けていきたいと思えます。

学生のページ

総会学術大会の役割と参加する意義

大阪大学大学院医学系研究科
梅原健輔

はじめに

平成26年4月10日(木)～13日(日)にかけて、第70回総会学術大会が横浜で開催された。今回、幸運にも学生会員派遣者として参加する機会を得たので、特に印象に残った講演を中心に学生会員の視点から本学術大会について報告する。

学生対象講演

特に印象深かった講演としてまず、学生対象講演を挙げたい。コロンビア大学に現在留学中の松村光章先生、山口大学医学部附属病院技師長の上田克彦先生、そして大阪大学の石田隆行先生がこれまでの経験をもとにそれぞれの立場から研究の魅力などを講演された。石田先生の講演の中で、特に印象深い話があった。人生の転機となり得る好機は突然巡ってくるものだが一瞬で過ぎ去ってしまうため、必ずチャンスを掴みとるために継続的な努力と準備が必要である。この言葉は自身にさらなる努力を課すことを決意させた。

また、今回講演された3人の先生方に共通しているのが世界トップレベルの大学への留学経験で、言語に関して苦労しながらも海外で着実に研究業績を上げてきたことを知り、驚くと同時に勇気付けられた。

私自身も今夏、ボストンのハーバード大学医学部・マサチューセッツ総合病院三次元画像研究所への留学を予定しているが、本講演を通じて、言語に関して不安はあるものの勇気を持って渡米し、自身が海外でどこまで通用するのか挑戦してみたいという思いを改めて強くした。

CADの過去・現在・未来

学術的に興味深かった講演をもう一つ挙げたい。それは、桂川茂彦先生の専門講座5(画像工学2)「CADの過去・現在・未来」である。現在、コンピュータ支援診断(computer-aided diagnosis: CAD)に関する研究を行っているため、CAD研究が発展した経緯や今後の展望について以前から興味があった。40分という短い時間ではあったが、桂川先生のこれまでの研究の実例を交えながらわかりやすく、そして、研究のヒントとなる事項も随所に散りばめられていた講演内容だったので非常に興味深かった。本講演を通じて、CADの新たな方向性を模索するためにはこれまでの研究成果をきちんと踏まえたうえで、他分野との融合や発想の転換をしなければならぬと感じた。時間の関係上、一番興味があったCADの未来については多くは語られなかったが、その日の夜にお酒を酌み交わしながら桂川先生から直接、考えを伺う機会に恵まれた。CADのさらなる可能性に気付かされ、自身が目指すべきCADはどのようなものか、どうあるべきかを考える大きな契機となった。

国際医用画像総合展(ITEM)

会期中には、学会会場内の展示ホールで国際医用画像総合展(ITEM 2014)が開催された。学会参加者は無料で入場でき、国内外有数の医療機器メーカーの最新機器展示を見ることができる。1日ですべての展示ブースを見ることは会期中のスケジュールの関係上困難であったため、合間を縫って見学した。初日はその規模と入場者数に圧倒され、なかなか思うように見ることはできなかったが、2日目以降はメーカーの方から詳しく話を聞くこともでき、想像以上の医療機器の進歩に驚かされ

た。学会参加を兼ねて、最新の医療機器に関する知見を得るには絶好の機会である。

シカゴ会への参加と出会い

私が学会参加の重要な目的の一つに位置付けていたのは、人脈を広げることである。学会2日目の夜、石田先生の紹介でシカゴ会に参加させていただいた。シカゴ会とは土井邦雄先生とともにシカゴ大学で研究された方々を中心に、CAD研究に携わる人々が親睦を深める懇親会で、総会の会期中に毎年開かれる。土井先生をはじめ、CAD研究の第一線で活躍しておられる数多くの先生方と名刺を交換し、これまでの体験や研究に関するアドバイス、そしてありがたい激励の言葉をいただいた。この交流を通して、漠然と考えていた将来像がより具体的になり、Ph.D.を取得し世界で通用するトップクラスの研究者になるという目標をより強固なものにした。この一夜の出来事は、生涯忘れることはないだろう。

学術大会の役割

学術大会は、もちろん学術研究の成果を発表する場であるが、それと同時に、教育講演や入門・専門講座が

多数用意されていることから、主体的に学ぶことができる場でもある。さらに、学会に集う者同士が活発に交流することで自身の研究や臨床に活かすだけでなく、今後の生き方を思案するきっかけを掴みとる場であることも学術大会の大きな役割の一つではないかと考える。

おわりに

今回、初めての総会学術大会であったが、多方面で充実した、そして刺激的な4日間であった。これを機に、大学院生として、そして研究者として自らの研究に責任を負い、主体的に研究を遂行し、不断の努力をしていかなければならないと改めて深く心に刻んだ。

謝辞

第70回総会学術大会への参加に際して、学生会員派遣者として選出・助成してくださいました日本放射線技術学会 真田 茂代表理事ならびに江口陽一大会長、市田隆雄実行委員長をはじめ、関係各位の皆様がこの場を借りて心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、本制度への応募を快諾していただきました大阪大学大学院医学系研究科 石田隆行教授に深く感謝致します。

学生のページ

総会学術大会を通じて得たもの

大阪大学大学院医学系研究科
大田淳子

はじめに

私は今回学生派遣制度に応募するにあたり、総会学術大会に参加する目的を以下の三つに掲げていた。

- (1) 日本の放射線技術学全体のレベルに触れ、自らを奮い立たせること
- (2) 演題を聞き、自らの研究に役立てること
- (3) 最新のトピックスを知ること

(1)、(3)については、特によく達成されたと感じている。しかしそれ以上に、活躍されている先生方にお会いし、研究生生活や研究に関する考え方について実際にお聞きする機会に恵まれたことが非常に感慨深く、さらには、現在の自分自身を顧み、今後の研究人生について考えるよい機会となった。

印象に残った場面

印象に残った講演、イベントなどについて具体的に述べていく。

1. CADの過去・現在・未来

コンピュータ支援診断(CAD)の分野で今までなされてきた研究についての紹介が中心で、現在私の行っている研究に関連した講演でもある。講演の中では、CADのこれからに関する言及は少なかったのだが、その後、CADの未来について桂川茂彦先生から直接ご意見を伺う機会に恵まれた。

これまでは画像診断に関して病変の検出に多くの時間が費やされてきたが、今後の可能性として診断領域に限定しないあらゆる分野への応用などについてお聞きすることができた。

現在までに、CADや画像工学の分野でさまざまな方法論が確立されてきており、これまでは病変の検出が主に行われてきたが、これまでの手法を似たような目的に適用し新たな臨床に役立つ研究をしていくことには限界があるのではないかというお話も今までに伺ったことがあった。しかし、この分野で次世代を切り拓いていくには、今ある技術をしっかり習得したうえで、新たな情報の収集を行っていくことでまだまだ多様な可能性を秘めていることを実感でき、研究に対するさらなる意欲が湧いてきた。また、新たな手段を生み出すためには、もっと画像工学の知識を深めていく必要があるとも実感させられた。

2. RPT誌優秀論文土井賞受賞講演

RPT誌は日本放射線技術学会と日本医学物理学会の両学会によって発行されている英語論文学会誌で、英語論文執筆の経験が少ない会員を育成することを考慮した査読方針が採られている。優秀論文土井賞は診断分野・核医学分野・治療分野の3分野に分かれて選ばれる。

あまりRPT誌について知識がなかった私にとっては、登竜門としてのこの論文誌の役割を知れたこと、優秀論文賞というものの雰囲気を感じられたことが最も意義深かった。かつての学生派遣者も数名この優秀論文賞を受賞しており、今年度診断分野受賞の峠 理沙氏も2年前にこの総会学術大会の学生派遣者として寄稿しておられる。

われわれ大学院生は、研究をすることを自ら選択し、研究、勉強に多くの時間を費やす覚悟をして進学したわけであるから、より多くの知識をもち、高いレベルを目指すべきで、学生でもこのレベルの発表ができるとい

うよりもむしろ、大学院生だからこそ、このレベルの研究ができると思わせる存在でなくてはならないと考えている。

私も遠からず、今度はRPT誌優秀論文土井賞受賞者としてこの学会に戻ってくるべく、研鑽を積んでいこうと思う。

3. 国際医用画像総合展(ITEM)

ITEMでは、日本や海外の医療機器メーカーの最先端の医療技術を知り、体感することができる。入場者数の多い中、いくつかのブースで詳細な説明を伺ったり、装置に触れ体験したりすることができ、非常に楽しむことができた。

それに加え、これから研究を進めていく中でさらなるステップアップを目指すには、与えられたテーマを遂行するというスタンスではなく、自分でどのようなテーマが医療の役に立つか、自らの研究に有用性があるかどうか、どうすれば日本のみならずひいては国際的に評価を受けることができるのかを考え、主体的に研究を行えるようにならなくてはならない、また、限られた時間の中でも自分の研究プロセスや研究結果すべてに責任を持てるようにならなくてはならないと考えている。そのために、学会やITEMで新たな話題にアンテナを張り巡らし情報収集することも研究活動の一環であると感じた。

謝 辞

最後になりましたが、第70回総会学術大会学生会員派遣として、このような機会を与えてくださった関係各位の皆様と、本制度への応募を了承してくださった指導教員の石田隆行教授に深く御礼申し上げます。